令和３年度

地域政策科学研究科（後期）

# 外国人留学生特別入試

# 小論文

時間 120 分

注意事項

1．試験開始の合図があるまで，この問題冊子を開いてはいけません。

2．問題冊子は，この表紙を除いて 6 枚です。
印刷不鮮明の箇所などがあれば，監督者に申し出て下さい。

3．解答は，別紙の解答用紙に横書きで記入して下さい。

4．この問題冊子とは別に，解答用紙が１枚と下書き用紙１枚が配布されています。
解答用紙の指定欄に受験番号を必ず記入して下さい。

5．試験終了の合図とともに，ただちに，筆記用具を机の上に置いて下さい。

6．解答用紙は持ち帰らないで下さい。

＜資料＞は，ブレイディみかこ『ワイルドサイドをほっつき歩け――ハマータウンのおっさんたち』（筑摩書房，2020 年）の一部である。＜資料＞を読んで，設問に答えなさい。

(1)レイとレイチェルの不仲の原因を，筆者はどのように分析しているか，300 字以内でまとめなさい。

(2)レイの価値観とレイチェルの価値観について，あなたが考えることを，700 字以内で述べなさい。

（問題作成の都合上，本文の一部を省略した。また，注および一部のルビは出題者がつけたものである。）

（注意）

解答にあたっては，解答用紙の 1 マスを 1 字に使い，句読点，引用符，括弧などはいずれも 1 字として扱う。ただし，算用数字およびアルファベットは 1 マス 1 字とする。書き出しは 1 マス空け，段落変えの時は必ず改行し，1 マス空けること。

〈資料〉ブレイディみかこ『ワイルドサイドをほっつき歩け――ハマータウンのおっさんたち』（筑摩書房、二〇二〇年）

夫婦喧嘩は犬も食わないというが、わたしはけっこう食う。

とくにこれが、カップルの双方をよく知っていて、双方を同じぐらい好きだったりすると、どちらの言い分もわかるし、ああ、この人ならこういう考え方をするだろうなとか、他方でこっちはそういう受け取り方をしちゃう人だもんなとか、両側から理解できるだけにつらい。何がつらいのかといえば、人間というものは、互いのことをまだ好きでも、もうあかんときがあるからだ。

そんなわけで、さいきんヤバい感じなのが、レイとレイチェルだ。仲間うちではシンプルに「レイズ」と呼ばれるこのカップル、結婚はしてないので厳密には夫婦ではないが、過去七年間、パートナーとして暮らしてきた。で、三十代のレイチェルはロンドン東部に二軒の美容院を経営するやり手の美容師であり、ケバいが別嬪のビジネスウーマンだ。他方、レイは彼女がそれぞれ違う相手との間に産んだ三人の子どもたちの面倒を見ながら、主夫業をしている六十代のおっさんだ。連合いをはじめとするレイの友人たちに言わせれば、「うらやましすぎ」「嘘のような本当の話」「いつかバチが当たる」というような関係である。

その二人の間に亀裂が入ったのは、（中略）EU離脱投票でレイが離脱票を入れたときだった。残留派のレイチェルが激怒して家庭で口論が絶えず、子どもたちの性格も暗くなるなど深刻な状況になったこともあったが、レイが「平和」（実際にはどう見ても「中和」になっちゃってるのだが）という漢字のタトゥーを腕に彫り、歩み寄りの意志を見せたことによっていったんは持ち直した。が、さいきんまたも二人の間に暗雲が垂れ込めている。

「家庭と仕事とどっちが大事なんだとか言われる」

とレイチェルは言った。

「レイズ」の仲が険悪、というか、もはやその状態も通り越して冷めきったものになってしまっていることは、良く晴れた初夏の週末、子どもたちを連れてブライトンの浜辺に遊びに来たときの二人の様子から明らかだった。なんかもう、言い合いもしないし、互いを無視すらしていない。通りいっぺんの人工的な「グッド・ペアレンツ」を演じている姿が凍てつくほど寒々しいのである。もう彼ら、ダメなんだろうか。

レイと子どもたち&うちの連合いと息子がジップライン（木々の間をワイヤーロープで滑る遊び）のために遊びに行っている間、カフェでレイチェルから話を聞いたところによると、彼女の不満はこうである。二軒の美容院を繁盛させたレイチェルは、三軒目を開く計画を立てており、従って非常に忙しい。高い能力と野心、努力を惜しまない勤勉さ、ジムで鍛え上げたタフな体を持つレイチェルは、はっきり言ってネオリベ、というか新自由主義の申し子と言ってもいい。

よって向上心のない人とは気が合わないタイプだが、レイと出会った頃は子どもたちも小さかったし、保育やベビーシッター代がかさんでいた時期だったので、育児に慣れていて主夫業も厭わない気のいいおっさんは、そのときの彼女が必要としていた存在だった。

だが、レイが「週末は俺たちと一緒に過ごせ」だの「家族のためにもっと早く仕事から帰ってこい」だの言い出したので、ウザくなってきた。レイに言わせればレイチェルは働き過ぎであり、家族や自分のライフを犠牲にしてまでビジネスを広げる必要はないと主張するのだった。

彼らの労働に対する考え方の違いに、六十代のレイと三十代のレイチェルの世代差というものがくっきりと現れている。レイやうちの連合いの世代は、まだ英国が「ゆりかごから墓場まで」の福祉社会と呼ばれていた頃に社会に出た人々だ。「ハマータウンの野郎ども」[注2]は反体制的な不良少年たちだったけれども、なんやかんや言って不良たちには国のセーフティ・ネットがあったのだ。失業すればつるっと簡単に失業保険が出たし、怪我や病気をしてもＮＨＳ（国民保健サービス）で無料で治療してもらえるし（当時はいまと違って処方薬まで無料だった）、学費も無料だったので行こうと思えば大学にだって行けた。労働組合の力が強かった頃だから、現在と比べると労働者の態度もずっとデカかったのである。

「イングランドには僕を食べさせる義務がある」[注3]

と歌ったのはザ・スミスのモリッシーだが、中高齢の人々はそういう考えが通用する時代に大人になった。彼らにとっては、労働とは生活資金を手に入れることで、九時から五時まで真面目に働けば（モリッシーはそれさえ拒否したが）、後はパブに行ったり、休日は家族で出かけたりしてプライベートを楽しんでも、生活に不安を感じることはなかったのである。

しかし、ブレア[注4]政権の「第三の道」時代に育ったレイチェルは違う。こちらはもうコテコテに新自由主義のメリトクラシー（能力主義）一色の英国しか知らない世代だ。だから彼女にはレイが覇気のないダメなおっさんに見える。

「労働者階級の人間は、仕事があって、快適で清潔な家に住めて、年に二回旅行ができればそれで満足なんだ、とかレイは言うけど、それって向上心がなさすぎだし、甘い。そんなことを言っていると、いまの時代はどんどん生活水準が下降して、気が付いたら下層に落ちている」

レイチェルはそう言った。これは、いわゆるあれだ。ブレグジットやトランプ[注5]大統領誕生で話題になった「中間層が抱える不安」ってやつ。労働者階級出身のレイチェルには、生活保護で子どもを育てているシングルマザーの友人もいるらしい。そんな友人たちは、緊縮財政でますます追い詰められているため、お金を貸したりしているそうで、自分も一歩間違えばそこに落ちるという不安は濃厚にあるという。

「もう年だからなんだろうけど、彼には野心がなさ過ぎて、子どもたちにも悪い影響を与えそう。だいたい、子どもたちも十代にもなれば、友だちと一緒に街に行ったり、映画を観たりしたいわけでしょ。それを今日だって、家族でブライトンに行くぞとか言い出して、あたしには仕事があるって言えば怒るし」

レイチェルはため息まじりに言った。

英国人は働かないというのはもはや幻想だ。英人材開発研究所（ＣＩＰＤ）が、千二十一社、

四百六十万人の英国人従業員を対象に行った調査で、二〇一〇年には「体調が悪くても出勤する」と回答した人は二六％だったのに対し、最近の調査では約三倍の七二％に増加している。こうした変化は、体調が悪くても働かなければならないというプレッシャーを感じる人が急増していることを示す。

さらに、雇用主となると、実に八六％が「体調が悪くても出勤する」と答えている。経営者であるレイチェルが、週末の稼ぎ時に働きたいと思うのもこうした数字を見れば当然のことなのだろう。

「価値観が違い過ぎる。他のことなら我慢できても、仕事のことだけは譲れない。第一、三人の子どもたちとレイの暮らしはあたしのビジネスにかかってるのに、ちっとも協力的になってくれない」

足手まとい、という言葉を、協力的でない、と言い直しているような冷たい声の響きだった。

ふっと、日本の人と尾崎豊[注6]の話をしたときのことを思い出した。尾崎豊は盗んだバイクに乗って学校のガラス窓を打ち割って回っても、その気になれば大学に行って就職して家庭を築けた経済成長の時代の若者だったのであり、就職氷河期を見て育ち「もはや経済成長はあり得ない、世界は資本主義からのソフトランディングの位置を探している」なんて縮小社会言説がまことしやかに語られている時代の若者たちが天真爛漫にガラス窓を打ち割るわけがない。みたいなことをその人は言っていたのだが、これはハマータウンのおっさんたちと英国の若者たちの関係にも似ている。

「額に汗して働けば報酬が得られる」みたいな生き方は退屈だと反抗する若者たちがカウンターカルチャーを盛り上げた時代と、「額に汗して働いても報酬が得られるかどうかわからない」歩合制やゼロ時間[注7]雇用契約が横行する時代。少しぐらい道を踏み外しても制度で保護された若者たちと、競争競争競争と言われて負けたら誰も助けてくれないばかりか、「敗者の美」なんて風流なものを愛でたのももう昔の話で、負けたら下層民にしかなれない若者たち。

おとなしく勤勉に働けば生きて行ける時代には人は反抗的になり、まともに働いても生活が保障されない時代には先を争って勤勉に働き始める。従順で扱いやすい奴隷を増やしたいときには、国家は景気を悪くすればいいのだ。不況は人災、という言葉もあるように、景気の良し悪しは「運」じゃない。人が為すことだ。

そういえば、レイがEU離脱に投票したとき、「EUのやり方にはファック・オフだ」と言っていたら、レイチェルが「ファック・オフとか言っててもしょうがないでしょう。うちの店は美容師も客もほとんどがEU移民なのよ。あたしのビジネス潰れたらどうしてくれるの」と叫んでいた。二人の間に流れる川は深くて暗い。

「あたしはただ、もっと働きたいの」

とレイチェルは言った。彼女は休みたくない、のんびりしたくない、家族でほのぼのとかしたくないのだ。もっと上にのぼりたい、というか、正確に言えば下に落ちるのが怖いのだ。

そんなことを考えながら窓の外に目をやると、レイと子どもたち、そしてうちの連合いと息子が歩いてくるのが見えた。みんなソフトクリームを舐めながら歩いていて、レイは次女のピ

ンクの水玉の帽子を被り、顎鬚に白いアイスがべっとりついている。
彼らが歩いてくる方向を見ていたレイチェルが、ゆるい動作で、でも意識的に首を振り、目を背けた。そしてバッグに手を突っ込み、スマホをチェックし始める。子どもたちを連れて入ってくるレイのことなどもう見ていない。
「鬚、アイスクリームがついてるよ」
とわたしがナプキンを渡すとレイが、ああ、と言って顎を拭った。レイチェルは一瞥もせずに一番下の子に「楽しかった？」と話しかける。黒人の父親を持つ一番下の子の縮れた巻き毛にレイチェルは指を這わせ、優しく頬にキスした。ジムのインストラクターだったこの子の父親がとんでもない女たらしで金遣いの荒いイケメンだったので、心身ともに疲れ果てていたときに、彼女の前に現れたおっさんがレイだった。人生のその地点では、彼女にはレイがちょうど良かったのだ。だけど、その地点をもうレイチェルは通り過ぎてしまった。
「さ、車が渋滞する前にロンドンに帰りましょうね」
レイチェルは子どもたちのほうを向いて言った。
「帰りは俺が運転するよ」
とレイが言うと、
「いや、大丈夫、あたしが運転する。あんたはゆっくり座ってて」
とレイチェルが答えたが、その過不足ない人工的な笑顔と声音にぞっとするような距離を感じた。
ノー・ウーマン、ノー・クライ、ノー・ウーマン、ノー・クライ。ボブ・マーリーがそう反復する歌が店内に響いている。
「サンクス。じゃあ年寄りは楽させてもらうよ」
つとめて陽気にレイが答えた。
ノー・ウーマン、ノー・クライ、ノー・ウーマン、ノー・クライ。赤い口紅を塗りなおして立ち上がったレイチェルは、やっぱり圧倒的な若い美人だ。その後ろから歩き出したレイの笑顔が、濡れたビール瓶から剥げかかったラベルみたいによれていた。
泣きたいのは、きっとおっさんのほうだ。

注

（注1）ＥＵ離脱投票：二〇一六年六月二三日、英国において欧州連合(ＥＵ)からの離脱を問う国民投票が実施され、残留約四八％、離脱約五二％の結果で、ＥＵからの離脱が決まった。

（注2）「ハマータウンの野郎ども」：ポール・Ｅ・ウィリスが一九七七年に出版した書物名から。労働者階級の「荒れている」「落ちこぼれの」少年たちを分析し、学校教育と労働者階級の再生産の関係に焦点を当てた、先駆的な文化批評。『ワイルドサイドをほっつき歩け』は、当時の少年たちが老境にさしかかった頃の物語である。

（注3）ザ・スミス：一九八〇年代のイギリスのロックバンド。ボーカルのモリッシーは「England is mine, it owes me a living」と歌った。

（注4）ブレア政権：トニー・ブレアを首相とする英国の政権（一九九七―二〇〇七）。労働党の社会民主主義路線に、新自由主義的な経済政策を採り入れた「第三の道」を提唱した。

（注5）ブレグジット：前述のＥＵ離脱投票の頃、British と exit の混成語として現れたことば。

（注6）尾崎豊：一九八三年、「15の夜」でデビューした日本のロックシンガー。

（注7）ゼロ時間雇用契約：週あたりの労働時間が明記されない形で結ばれる雇用契約。

（注8）ボブ・マーリー：一九六二年にデビューした、ジャマイカ出身のレゲエミュージシャン。